

## 他者評価と自己評価が学習者に与える影響について —日本語中級クラスにおける実践を通して—

林 朝子

### 1. はじめに

2006 年度前期、チューラーロンコーン大学文学部東洋言語学科日本語講座 3 年生対象の会話クラスにおいて、グループによる「商品アピール」の発表活動を行った。この活動の目的は、1) 授業内における学習項目と共に既習項目の知識・言語運用能力を総合的に表出する場を与えること、2) 共同作業の場において自主的・主体的に活動し、学習者同士による言語習得・言語運用能力の向上を図ること、である。また、各グループの発表後には他の学習者による評価（以下、他者評価）と自己評価を行い、必要であれば記入後学習者にインタビューを実施した。

本稿では、まず今回の実践を行った会話クラスの授業概要、発表活動への経緯・目的、そして他者評価と自己評価の利用が学習者に与える影響と評価を行うことの有効性について考察していきたい。

### 2. 授業概要

今回の発表活動及び評価を行った 3 年生対象の会話クラスについて概要を述べる。

科目名：日本語会話 3（必修科目、日本語レベルは中級程度）

学習者：35 名（2 年次の成績を基準に日本語能力が均等になるよう、17 名と 18 名の 2 クラスに分けた）

担当教師：2 名（1 名は非常勤講師）

授業期間：2006 年 6 月 5 日から 9 月 21 日まで（授業回数 29 回、内 4 回は中間・期末試験）

授業時間：週 2 回（月曜日・木曜日）、各 110 分授業

主な学習内容：スピーチ（毎回 1 名）、テキストに基づいた運用練習、ディクテーション

主な使用テキスト：『日本語上級話者への道』スリーエーネットワーク（以下、『上級』）

『聞いて覚える話し方日本語生中継（初中級編）』くろしお出版（以下、『生中継』）

以上が会話クラスの概要であるが、少しスピーチ<sup>(1)</sup>について触れておきたい。スピーチのテーマは「マイブーム」と教師側が決めた。それは話し手である学習者個人が興味・関心のある事柄であれば、スピーチの内容面（関心を引く話題、構成、語彙表現などを含む）、パフォーマンスの面（身振り、声の大きさ、発音などを含む）で、学習者が独話スタイルのスピーチでより運用能力を伸ばせると考えたためである<sup>(2)</sup>。また、聞き手の学習者にとっても、比較的身近な話題であったり、関心を持ちやすく、スピーチ後の質疑応答が充実するという面もある。実際、スピー

チの内容はわかりやすく、時にパフォーマンス面に重点を置いてしまう学習者もいたが、スピーチ後には活発な質疑応答が行われた。「マイブーム」をテーマとしたスピーチでは、聞き手に評価表への記入を行わなかった。そのかわりとして、スピーチ後に毎回、内容面とパフォーマンス面についてどうだったかを学習者（話し手・聞き手）に考えさせた。また、後日、スピーチを行った学習者には個人的に紙面にてアドバイスをを行った。これらは、「よいスピーチとは何か」を学習者に意識付けさせることを目的とした。さらに、その意識付けが、学習者同士の日本語運用力を判断する際にどの程度まで生かされ、後述する今回の発表活動に対する他者評価でどこまで適切な評価ができるようになっていくかを確かめる意味もあった。

### 3. 「商品アピール」発表活動への経緯・目的・発表内容

#### 3.1 経緯

2章の授業概要で記したテキスト、『上級』の学習項目「比較（第8課）」「言い換え（第7課）」、『生中継』の学習項目「勧め（第5課：買い物）」を授業で取り上げた。しかし、テキスト内の練習問題だけでは十分な運用練習ができず、ある程度まとまった項目を総合的に運用練習できないかと考え、グループ活動による「商品アピール」発表を計画した。

「商品アピール」というテーマでイメージしたのは、テレビの通信販売番組<sup>(3)</sup>である。学習者もタイ語や英語などの通信販売番組を見た経験があり、容易にイメージができた。通信販売番組での商品紹介のような発表であれば、「比較」「言い換え」「勧め」の表現を使う場面が増え、学習項目の総合的な運用練習が可能となり、表出する場が与えられると考えた。

グループは3人又は4人編成で、計11グループとなった<sup>(4)</sup>。

表1 発表活動までの日程

|       |                                                                                     |
|-------|-------------------------------------------------------------------------------------|
| 8月10日 | 『上級』第8課「比較」1回目                                                                      |
| 8月14日 | 『上級』第8課「比較」2回目<br>「商品アピール」発表について説明、グループ分け、話し合い<br>※次回までに発表のスクリプト作成                  |
| 8月17日 | 『上級』第7課「言い換え」1回目<br>「商品アピール」グループで話し合い<br>スクリプトをチェックしながら、教師も話し合いに参加                  |
| 8月21日 | 『上級』第7課「言い換え」2回目<br>『生中継』第5課「買い物（学習項目は「勧め」）」1回目                                     |
| 8月24日 | 『生中継』第5課「買い物」2回目（実際は十分な時間が取れなかった）<br>「商品アピール」グループで話し合い<br>※学生からスクリプトの再チェックの要求があれば行う |
| 8月28日 | 「商品アピール」発表1回目（6グループ） ※DVD撮影                                                         |
| 8月31日 | 「商品アピール」発表2回目（6グループ） ※DVD撮影                                                         |

表1からわかるように、「商品アピール」の活動とその中で使用する表現の導入は同時進行で行った。学習者にとっては多少の負担になった可能性もあるが、「勧め」の一部の表現（「～はいかがですか」等）は既習項目であり、また、商品アピールに有効な表現を多用することが結果的に

「勧め」になると考え、活動準備にそれほど影響はなかったと思われる。

### 3.2 目的

この活動の目的は、上記したように、まず、1) 授業での学習項目「比較」「言い換え」「勧め」と共に既習項目の知識・言語運用能力を総合的に表出する場を与えること、である。学習者は主としてその時点での学習項目だけに注意を向ける傾向があるが、このような総合的に日本語を運用できる機会を与えることで、学習者自身が持つ言語能力を発揮する契機となると考えた。

次に、2) 共同作業の場において自主的・主体的に活動し、学習者同士による言語習得・言語運用能力の向上を図ること、である。グループ活動としたのは、2) の目的のためであり、グループ活動を行う中で協働的な活動の場を与えたかったからである。個人での独話スタイルとしては「スピーチ」の場があるため、グループ活動を通して学習者がお互いに日本語能力を伸ばす機会になると考えた<sup>(5)</sup>。

### 3.3 発表内容

2 回の授業で行われた「商品アピール」の発表内容は、表 2 のように多岐にわたった。発表時間は 10 分以内とした。発表は全てビデオカメラで撮影し、DVD に録画した。

表 2 発表内容

|   | 商品名                  | 概要                          |
|---|----------------------|-----------------------------|
| A | 紳士オートバイタクシー          | 態度、言葉遣いなどが紳士的なオートバイタクシーサービス |
| B | ブリンフ・ブリング・ビューティーセンター | 美白、痩身等のための美容センター            |
| C | Motorola Jan AF30    | 携帯電話                        |
| D | IPOD NANO            | MP3 プレーヤー                   |
| E | 10 秒バター              | スティック糊状になったバター              |
| F | スーパーシリアル             | 健康的ダイエットができるシリアル            |
| G | ラブラブお見合い会社           | 素敵な相手を紹介するお見合い会社            |
| H | マジックスリッパ             | 履いて歩くだけで掃除もエクササイズもできるスリッパ   |
| I | グリグリあみぐるみ            | 毛糸で作ったぬいぐるみ                 |
| J | セクシーシャワーキャップ         | 様々な利点、用途があるシャワーキャップ         |
| K | JC ネットワーク            | 携帯電話のネットワーク                 |

A~E は 8 月 28 日、F~K は 8 月 31 日に発表が行われた。アピールする商品は各グループで自由に決めさせた<sup>(6)</sup>。C、D、I 以外は、学生自身が考えた商品である。「商品アピール」発表を学生に説明した時点では、主に口頭表現の部分での表現や発音等の工夫を中心に考えるように指導した。また、スクリプトをチェックした際には、発話が少なすぎる場合は増やすように指示した。しかし、実際の発表では、表現の内容面よりもジェスチャー面、特に、見た目のインパクトの方ばかりに気がとられてしまうグループもあった。

## 4. 他者評価

### 4.1 他者評価の方法と評価基準

「商品アピール」発表後、聞き手の学習者には簡単に記述式自由回答でコメントを書いてもら

った。コメントには良かった点とアドバイスを書くように指示した。各発表後の数分で書かなければならないという時間的制約と、学習者から日本語では思ったことを表現できないという発言があったため、タイ語による記入も許可した。コメント表を集めた結果、コメントの内容はともかく、日本語のみで記入した学習者は35名中6名であり、他の学習者は全てタイ語、あるいは部分的にタイ語を使用していた<sup>(7)</sup>。

他者評価は、第2章の授業概要の後半に記したように、毎回の授業で行っているスピーチ後の評価基準の意識付けがどの程度活用できているかを確認するためであった。毎回のスピーチ後に行った学習者との評価基準を表3に記す。

表3 スピーチ「マイブーム」評価基準

|   |       |                                |
|---|-------|--------------------------------|
| ① | 内容    | トピックの選び方、構成、展開が聞き手をひきつけられるかどうか |
| ② | 表現の工夫 | 習った表現の使用、自分なりの工夫               |
| ③ | 文法・語彙 | 文法・語彙面での正確性                    |
| ④ | 発音    | 聞き取りやすいか、イントネーション・アクセント等       |
| ⑤ | 速度    | 聞きやすいスピードか、単調ではないか、リズムに変化があるか  |
| ⑥ | 声の大きさ | よく聞こえるか                        |
| ⑦ | 態度    | 暗記、アイコンタクト、姿勢、身振り              |
| ⑧ | 視覚資料  | 分かりやすいか、効果的な使い方ができているか         |
| ⑨ | 質疑応答  | 質問に対し適切な応答ができているか              |

今回のグループ発表の評価基準が全て表3の評価基準に一致するとはいえないが、スピーチもグループ発表も「人前で話す」というカテゴリーで括ことができると考えた。「表現の工夫」の評価には今回の活動の中心となる学習項目「比較」「言い換え」「勧め」が有効に使えているかどうかの評価が含まれる。また、グループ活動であるので、評価は全体的に個人対象の評価でもあり、グループ対象の評価にもなる。

#### 4.2 他者評価の結果と考察

では、表3に記した評価基準に照らし合わせ、学習者による他者評価の結果とそれに対する考察を行う。

①内容：ほとんどの学生が、「商品のアイデアが面白い、すごい」といったトピック（この場合は商品）の選び方へのコメントをした。内容については「内容が面白い」「よくできた」等具体的にどうだったかというコメントはほとんどなかった。しかし、中には「社会問題と関連のある内容でいい」「説明が詳しく、ポイントがはっきりしている」「順番・順序がいい」というコメントも少数みられた。

②表現の工夫：この点についてはほとんどの学生がコメントがなかった。「比較表現が多い」「会話の授業の表現を使っている」とのコメントがあっただけである。ここで注意したいコメントとして、「ことばが難しい」とのコメントがあった。今回の「表現の工夫」として「言い換え」があるが、このコメントを書かれた発表グループの内容には確かに新出語彙が多かった。しかし、このグループは発表内でわかりやすく「言い換え」をしてい

る。この点から、聞き手は発表者の日本語をどの程度まで正確に聞き取れているのかという問題点が浮かび上がった。

- ③文法・語彙：この点についてはコメントがなかった。発表を聞いたその場で文法・語彙の正確性についての判断はこの時点では無理なようであった。ただ、一つ『～なければならぬ』より『～たらしい』を使った方がいい」というコメントがあった。これは②に分類される回答でもあるが、細かい点に気づけた学生もいた。
- ④発音：発音については「すらすら」「ぺらぺら」話すことが「よい発音」と認識しているようである。実際に、35 名中 17 名がグループDの発音がよいと記した。確かにグループDの発表者は途中で止まったりせずかなりの速さで話せる。しかし、アクセント・イントネーションなどには間違いが多い。聞き手である学習者にはアクセントなどの間違いは聞き取れず、速いスピードで話せることがよいと考えられているようである。
- ⑤速度：「スピードが速すぎる」「速過ぎなくていい」というコメントがあった。
- ⑥声の大きさ：「声が小さい」「声が大きくてよく聞こえる」というコメントがあった。
- ⑦態度：「身振り手振りを工夫するとよい」というコメントがあった。
- ⑧視覚資料：「ビデオの活用が上手」「チャートの使い方が上手」「(わかりやすくするために) 絵を見せたらいい」というコメントがあった。
- ⑨質疑応答：「よく質問に答えられた」というコメントがあった。

しかし、学習者からのコメントには①～⑨には分類できないものもあった。「アクションが面白い(動きが派手という意味)」「アクションが少ない」「ダンスが楽しい」「絵が上手」といった今回の発表の目的以外の部分でのコメントが出た。これは学習者が発表を見る場合に、発表の内容面より視覚的な非言語部分のパフォーマンス面に注意が向けられていると考えられる。また、視覚的な部分は発表直後に強い印象が残りやすく、このようなコメントが多く見られたのであろう。

学習者による他者評価は、学習者が判断基準を持たないために主観的になりやすい、相手への気遣いからよい評価をする点が以前から指摘されている(高木 1992)。スピーチを通して評価基準を明示してきたつもりであったが、今回の他者評価へのコメント結果を見ると、「おもしろい」「よくできた」という主観的なコメントと視覚的な非言語部分へのコメントが大部分を占めたことで、やはり学習者にとって評価基準を明確に把握することは困難であるとわかった。また、コメントには良かった点とアドバイスを書くように指示したが、ほとんどの回答は良かった点のみであり、相手への気遣いも含まれた結果だと思われる。

以上のように学習者による他者評価は筆者の期待に沿うコメント内容ではなかった。その原因としてはやはり「評価基準に対する認識の曖昧さ」「相手への気遣い」が強く感じられた。最終的には学習者同士が協働的に学習できる環境を作っていきたいと考えるが、その場合、「相手への気

遣い」は排除したい要因である。学習者は評価基準も曖昧であり、どんな話し方、どんな発表がいいのかを正確に把握できていない。それを解決するために、今回の発表に関して自己評価を行うことにした。自己を冷静に客観的に観察する機会を与え、自分自身を評価することで、評価基準がある程度認識されるのではないかと考えた。また、自分自身に対する評価を通した後であれば、評価基準の認識と他者を冷静に判断する能力が生まれ、「相手への気遣い」をしながらも学習者同士での有効な他者評価につながると考えた。

## 5. 自己評価

### 5.1 自己評価の方法と評価項目

グループ発表は DVD 録画をしてあったため、学習者全員に DVD2 枚を配布し、自分のグループの発表を観察し、自己評価表に自由記述することを 10 月の休み期間の課題とした。DVD に全てのグループ発表が入っており、自分のグループだけではなく他のグループとの比較を通し、自分のグループを客観的に観察する機会でもあった。自己評価表の回収は後期の第 1 回目の授業で行った。また、他者評価の時と同様にタイ語の使用も認めた。休み期間であるため時間的制約はないが、細かい点まで記述するにはタイ語使用が必要であった。自己評価表を配布する際には「具体的に書く」ことを強調した。また、各自が自分の発表を観察し問題点に気づいた後、今後どう改善すればよいのかも記入させた。これは、今後学習する上で各自が自分の不得手部分を意識し、自律学習へのきっかけとなると考えたからである。自己評価項目を表 4 に記す。自己評価での評価項目は大きく「グループ面」と「個人面」に分けた。

表 4 自己評価項目

|         |   |                     |            |
|---------|---|---------------------|------------|
| 「グループ面」 | ① | 商品アピールの方法           | 改善点<br>改善策 |
| 「個人面」   | ② | 発音（イントネーション、アクセント等） |            |
|         | ③ | 声・態度                |            |
|         | ④ | 文法・語彙               |            |
|         | ⑤ | 自分の話し方で特に欠けている点     |            |
|         | ⑥ | 今後の課題               |            |

### 5.2 自己評価の結果と考察

学習者による自己評価の結果にとそれに対する考察を行う。回収人数は 35 名中 32 名である。

#### 「グループ面」

- ①商品アピールの方法：「よくできた」「説明がわかりやすい」などプラス評価を行った学習者が 23 名いた。自己評価は他者との視点が入りにくいなどの点から、全体的にマイナス評価が多くなると指摘されている（村田 2004）が、グループ全体を対象とした自己評価には他者評価的な視点が入り、今回のようなプラス評価が多く見られたと考えられる。また、グループとして発表ができたという達成感、満足感を得られたというコメントもあった。プラス評価をしながらも、マイナス評価の記入も見られた。主なものは、「1 つの文が長すぎて、聞き手が

理解しにくい」「表現の工夫不足」「質疑応答への準備不足」など内容面、「ジェスチャーが不自然」「アイコンタクトが無い」などジェスチャー面へのコメントが多かった。改善方法としては、「語彙・表現を増やす」「発表前に他人の視点を入れる」「考え方を広める」といったものが挙げられており、自律的、協働的な意識が窺われる。

#### [個人面]

②発音：「一応OK」とのプラス評価は3名のみで、残り29名は何らかのマイナス評価を行った。

プラス評価をした3名に関しては、実際にはアクセント、イントネーションなど改善すべき点が多く見られるが、本人は気づいていないようである。マイナス評価には「タイ語のアクセントが出る」「外来語が英語のよう」「イントネーションが高すぎる」「高低の幅がわからない」「文末が上がる」などのコメントが見られた。評価を記入する場合には例を挙げて具体的に書くようにと指導したが、改善点として自分の発音を明確に記述することはできなかったようである。改善方法としては、「シャドーイング<sup>(8)</sup>を行う」「日本人の発音を観察する」「日本人の友達や先生に訂正してもらう」「友達同士でチェックし合う」などのコメントが出た。ここでも、自律的、協働的な意識があると考えられる。しかし、コメントの中には、「発表になると発音のことを忘れる（5名）」「正しい発音との違いが分からない（3名）」という内容があった。このコメントを記したのは数名であるが、4.2で述べた学習者の「よい発音への認識」、発表時の発音、授業中の発音練習<sup>(9)</sup>を鑑みると、発音に関しては、1) 発音の重要性の認識が低い、2) 正しい発音がわからないのではないかと、という問題点が出てきた。

③声・態度：声については、「声が小さい」「声が大きくて、よく聞こえる」というコメントのみであった。改善点としては、「もっと声の大きさに変化をつける」というものがあった。態度については、「皆を見ていない」「緊張しすぎている」「ジェスチャーが大げさすぎる」等のコメントがあり、改善策としては「緊張しないように友達の前で話す練習をする」「発表前に友達にチェックしてもらう」といった協働的な活動が有効であると考えているようである。

④文法・語彙：発表内容に関しては、マイナス評価はほとんどなかった。これは1度教師がスクリプトをチェックし、間違いを訂正したからである。ただ、改善点としては、「もっと比較をわかりやすく使うべきだった」「難しい語彙を使った」等のコメントが見られた。しかし、質疑応答に関しては、ほとんどの学習者が「文法（助詞、動詞のフォーム）・語彙の間違いが多かった」「語彙がわからなくて、言いたいことをうまく話せなかった」とコメントしている。改善点・改善策として、「前もって関連語彙・表現を準備しておく」「友達の前で発表して質問してもらう」など、発表前に自律的・協働的に対処できることへの気づきが見られる。

⑤自分の話し方で特に欠けている点：ほとんどの学生が複数のコメントをした。コメント数が多かったものから挙げていく。正しい発音（14名）、自信（7名）、ジェスチャーやアイコンタクトなど態度（5名）、文法（4名）、言いたいことを言うための語彙（4名）、気持ちを込めた話し方（3名）等が出された。他者評価の結果では「よい発音」への認識がスピード面だけの流暢さに向けられていたが、自己の発音観察を通して、アクセントやイントネーションなどに意識が向けられたように思う。

⑥今後の課題：⑤のコメントと関連して回答したものが多かった。正しい発音を身につける（16名）、質問をよく聞き、適切に自分の意見を述べる（7名）、自信を持つ（6名）、語彙を増やす（4名）、文法練習（3名）、聞く練習（2名）等が挙げられた。「適切に自分の意見を述べる」と「語彙」には、自分の考えを的確に相手に伝えたいとの気持ちが共通していると考えられ、同等のコメントとしてまとめることも可能であろう。

以上、自己評価の結果の概要と考察であるが、⑤自分の話し方で特に欠けている点、⑥今後の課題として、多くの学生が発音を挙げた。しかし、発音に関しては②発音でも触れたように、実際には「発音が悪いことはわかるが、どう違うか」が分からず、正しい発音も聞き取れないのではないかと思われる。

## 6. 「発表→他者評価→自己評価」が学習者に与える影響

「発表→他者評価→自己評価」の手順を踏んだ後の2006年度後期3年生会話クラスの観察から、今回の一連の活動が学習者にどんな影響を与えたかをまとめとして述べる。

一連の活動後、学習者の日本語学習における各自の目標が以前より明確になったと考えられる。これは、後期に行ったスピーチに対する他者評価のコメントからの観察結果である。以前であれば漠然と「よかった」等のコメントがほとんどであったが、「〇〇という表現がとてもよかった」「声やリズムに変化がなくて単調だった」「質問への答えの準備をもっとしたほうがいい」など、具体的なコメントが増えた。学習者によっては、常に表現などについてコメントする者もあり、日本語学習上での各自の目標が意識化されたとと言えるだろう。

特に明確な目標は「語彙表現不足を補う」ことであった。後期のクラスではスピーチの他にディスカッションも多く行い、各自の意見を述べる機会が増えたが、スピーチ内容においても、ディスカッションにおいても、自分の考えを何とか的確に相手に伝えようと語彙や表現に多くの工夫が見られた。これは5.2で触れた⑥今後の課題の内容に一致するものである。

このように、「発表→他者評価→自己評価」という一連の活動を通じたことで、「よい話し方」に対する認識が高まり、自己目標を各自が意識化し、他者を的確に評価することで自分の不足部分を補っていく態度が生まれてきたと考える。また、他者にマイナスの評価をされた場合でも、その評価を肯定的に受け入れることができるようになり、自己を客観的に見つめることができる

ようになったと言えるであろう。

以上、今回の一連の活動後の授業観察から、日本語学習において他者評価と自己評価の利用が、学習者の学習に対する有効な意識付けを促す手段であることが分かった。

## 7. 今後の課題

最後に、いくつかの問題点を挙げ、今後の課題としたい。

- 1) 評価方法：今回は自由記述のみであったため、記述方法の説明不足からコメントが書けなかった学生もいると考えられる。多肢選択と共に使用する必要性を感じた。
- 2) 個々の改善方法：今後は各学生が意識した問題点を具体的に取り上げ、どのように改善していくのか、改善されるのかを調査していく必要がある。
- 3) 発音への意識：自己評価結果では発音へのコメントが多く見られたが、その後の授業観察では一部の学生を除いて、ほとんど発音を改善しようとする態度が見られなかった。その原因としては、やはり正しい発音の認識が不可能であることが大きいと考えられる。また、一連の活動後の他者評価のコメントにも発音に関する記述はほとんどなかった。4.2②表現の工夫でも触れた、学習者がお互いに相手の日本語を正確に聞き取れていない要因の1つとしても不正確な発音が大きく影響していると考えられ、正しい発音への認識の重要性は高いであろう<sup>(10)</sup>。

この3点に関しては、今回の実践では観察ができず、今後の課題としていきたい。

## 注

- (1) 「スピーチ」の構成、身振り・アイコンタクト・声の大きさなど注意点については、2年生後期で学習しているため、3年生のスピーチ導入時には復習として学習者から「よいスピーチ」について意見を出してもらった。
- (2) Scarcella and Oxford (1992) による「テーマ重視」の指導モデルと関連すると考える。
- (3) 本来であれば、学習者に日本語の通販番組を見せるべきであるが、この時点では入手できなかった。
- (4) グループ編成の方法は、2つのクラスで異なる方法をとった。これは各クラスの学生間の人間関係を考慮した上である。一方のクラスでは学習者にグループ編成をまかせ、もう一方のクラスでは教師がリーダー格のある学生を中心に日本語能力面を考慮しグループ編成を決めた。今回の活動の場合、どちらの編成方法が適しているかは把握できないが、発表自体を通してグループ編成の方法による内容の差には気づかない。
- (5) 学習者にグループ活動を意識付けるために、発表内容は個人面・グループ面で評価すると伝えた。
- (6) 商品は各グループが相談の上で自由に決めたが、最終的に商品を決定する前に教師が目を

通した。例えば、「話す辞書」「新ドラポケット」といったあまりに想像上の商品に関しては、変更を求めた。

- (7) 学習者のコメントにはタイ語使用が多かったため、日本語講座 4 年生・5 年生数人に日本語訳を依頼し、訳後には翻訳担当者と内容の確認を行った。必要な場合には、学習者にもインタビューを行った。自己評価表のコメントに関しても同様。
- (8) 当大学では、2 年次の会話クラスにおいて、1 年間を通しシャドーイングによる発音指導を行っている。学習者にシャドーイングの意義・方法を理解させ、授業外でも各自で行うように指導している。ただし、シャドーイング教材として適当な日本語音声の選択を教師側は注意していく必要がある。
- (9) 3 年生の会話クラスでは、特に発音指導の時間はとっていない。気になる発音やクラス全体に共通するような間違った発音は授業中に取り上げて、リピート練習をさせることがある。
- (10) 学習者の正しい発音に対する認識がどの程度なのかは、2006 年度後期の実践を通し、現在分析を進めている。

#### 参考文献

- 茜八重子 (2001) 「多人数の口頭表現指導についての考察」『講座日本語教育』第 37 分冊、早稲田大学日本語研究教育センター、62-87
- 池田優子 (2006) 「初中級レベルの学習者の口頭表現における問題点ー『自己紹介を通してー』」『日本語と日本語教育』第 34 号、慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター、131-165
- 岡部悦子・蒲谷宏 (2000) 「日本語学習者の口頭発表場面におけるスピーチレベルについて」『講座日本語教育』第 36 分冊、早稲田大学日本語研究教育センター、111-134
- 高木裕子 (1992) 「高次元での『自己評価表』を巡って」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』3 号、77-98
- 東海大学留学生教育センター口頭発表教材研究会 (1995) 『日本語口頭発表と討論の技術』東海大学出版会
- 村田晶子 (2004) 「発表訓練における上級学習者の内省とピアフィードバックの分析ー学習者同士のビデオ観察を通じてー」『日本語教育』第 120 号、日本語教育学会、63-72
- Scarcella, R.C. and Oxford, R. L. (1992) The Tapestry of Language Learning : The Individual in the Communicative Classroom, Heinle and Heinle Publishers.

付記: 本稿の一部はタイ国日本語教育研究会第 19 回年次セミナー分科会 (2007 年 3 月 17 日、於: 国際交流基金バンコク日本文化センター) において発表を行いました。その際には参加者の皆様から大変有益なコメントを頂きました。深謝いたします。